

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2016/07/01

## 英国民投票の影響を見極め

| 通貨ペア                   | 基調  |  | ページ数  |
|------------------------|---|--|-------|
| <a href="#">ユーロ/円</a>  |    | <b>月・週・日で三役逆転が点灯</b><br>予想レンジ： 109.000～116.900円  | 2 - 3 |
| <a href="#">ユーロ/ドル</a> |   | <b>ECB理事会に注目</b><br>予想レンジ： 1.07000～1.14000ドル     | 4 - 5 |
| <a href="#">ポンド/円</a>  |  | <b>続落の確率大</b><br>予想レンジ： 129.000～141.000円         | 6 - 7 |
| <a href="#">ポンド/ドル</a> |  | <b>ポンド安とドル高の両面から</b><br>予想レンジ： 1.25000～1.37000ドル | 8 - 9 |

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

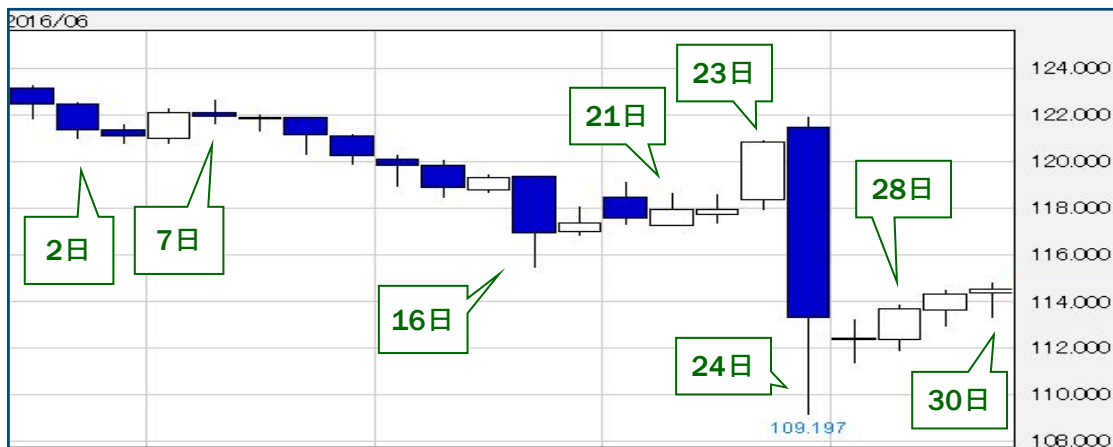
Copyright©2016 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

## ユーロ/円 6月の推移

EUR/JPY

6月のユーロ/円相場は109.197～123.315円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約7.1%の大幅下落(ユーロ安・円高)となった。

日銀が金融政策の現状維持を決定した事で円買いが優勢となった上、英国の国民投票で欧州連合(EU)離脱が優勢となってリスク回避の動きが強まると、ユーロ/円は2012年12月以来となる109.197円まで急落。売リ一巡後はやや値を戻すも、心理的節目の115円ちょうどを回復できないなど、上値の重さを引きずる中で取引を終えた。



## 四本値

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 123.186 |
| HIGH  | 123.315 |
| LOW   | 109.197 |
| CLOSE | 114.538 |

|     |  |
|-----|--|
| 2日  | 欧州中銀(ECB)は政策金利の据え置きを決定。同時にECBのスタッフ予想が公表され、ユーロ圏GDP伸び率見通しは2016年が1.6%、17年は1.7%、18年は1.7%(3月時点:1.4%、1.7%、1.8%)、インフレ見通しは16年が0.2%、17年は1.3%、18年は1.6%(同:0.1%、1.3%、1.6%)とした。ドラギECB総裁は「量的緩和を少なくとも2017年3月まで実行」「量的緩和を持続的にインフレが調整されるまで実行」「成長リスクは下方向に傾いている」「下サイドのリスクは世界経済や英国の国民投票に関係している」などと発言した。 |
| 7日  | 英国のEU離脱を問う国民投票などを控えてドイツ国債に買いが集まり、独10年債利回りが0.04%台まで低下。これがユーロの重石となり、ユーロ/円は121.657円まで値を下げた。   |
| 16日 | 日銀は金融政策の現状維持を決定。大方の予想通りの結果ではあったが、これを受けて仕掛け的な円買いが強まった。その後、英世論調査で離脱支持が残留支持を上回ったと報じられた事や、NYダウ平均が一時下落した事から、リスク回避の動きが強まった事も重石となり、ユーロ/円は115.498円まで下落した。  |
| 21日 | ドラギECB総裁が「必要なら責務の範囲内で利用可能なあらゆる手段を講じる用意がある」「ユーロ圏のインフレは依然として抑制されている」などと発言。これを受け、ユーロ/円が117.497円まで下落した。  |
| 23日 | 英EU離脱に関する複数の英世論調査で残留支持が離脱支持を上回った事を受け、アジアや欧州株が上昇。NYダウ平均は2週間ぶりに18000ドルを回復すると、ユーロ/円は120.925円まで上昇した。   |
| 24日 | 英国でEU離脱を問う国民投票が終了。集計開始直後に残留優勢が伝えられると、ユーロ/円は一時121.940円まで上昇。しかし、徐々に離脱優勢が伝えられると、ポンド/円相場でポンド売り・円買いが急速に強まると共に、日経平均が1200円超下落。ユーロ/円は109.197円まで急急落した。ただ、下げが一服すると115.40円台まで値を戻すなど、神経質な展開となった。   |
| 28日 | 英EU離脱が決定した事を受け、ドラギECB総裁が「向こう3年間のユーロ圏経済成長率が0.3～0.5%押し下げられる可能性がある」との見方を示した。  |
| 30日 | 6月ユーロ圏消費者物価指数・速報は前年比+0.1%と予想(±0.10%)を上回る伸びとなった。  |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/JPY

## 日 経 平 均

|       |          |
|-------|----------|
| OPEN  | 17097.22 |
| HIGH  | 17145.95 |
| LOW   | 14864.01 |
| CLOSE | 15575.92 |

## 独 D A X

|       |          |
|-------|----------|
| OPEN  | 10242.78 |
| HIGH  | 10340.84 |
| LOW   | 9214.10  |
| CLOSE | 9680.09  |

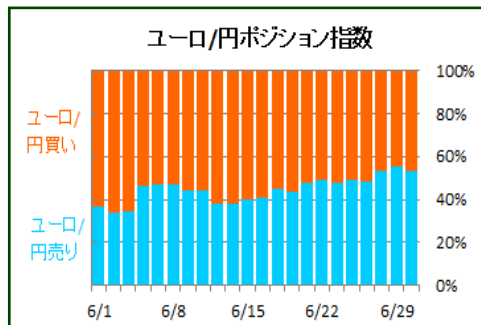
## 独2年債利回

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | -0.515% |
| HIGH  | -0.505% |
| LOW   | -0.740% |
| CLOSE | -0.661% |

## 独10年債利回

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 0.153%  |
| HIGH  | 0.158%  |
| LOW   | -0.170% |
| CLOSE | -0.130% |

## 6月のポジション動向



## 7月のユーロ圏の注目イベント

- ・5月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・5月独鉱工業生産(7日)
- ・7月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(19日)
- ・欧州中銀金融政策発表(21日)
- ・7月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(22日)
- ・7月独Ifo景況感指数(25日)
- ・7月独雇用統計(28日)
- ・7月独消費者物価指数・速報値(28日)
- ・7月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(29日)

## 7月の見通し

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

6月のユーロ/円は、大きく下落して終えた事により月足の一目均衡表で三役逆転が点灯した。既に日足・週足でも点灯しており、これは強力な売りシグナルと考えられる。115円は心理的節目以外にも、先月24日急落前の安値(先月16日に付けた115.498円)もあり、分水嶺となっている。同レベルを上抜けない間は下値模索の機運が高まりやすく、先月27日安値(111.370円)を割ると、24日安値(109.197円)更新を試す事となるだろう。24日高安の半値戻しが115.569円である事からも、反発局面に入るためには115円台回復が条件となるだろう。

英EU離脱は英国は無論、隣接する欧州にとっても悪影響との見方が浮上し、一部で欧州中銀(ECB)の追加金融緩和観測が浮上している。もっとも、先月TLTRO2を実施した直後であり、今月のECB理事会で追加金融緩和に踏み切る公算は小さいと見る。今回は英国民投票後初の理事会であり、普段以上にドラギECB総裁会見に注目が集まりそうだ。その中で緩和を示唆するようならば、ユーロ売り材料となる事も考えられる。声明に注意したい。(川畑)

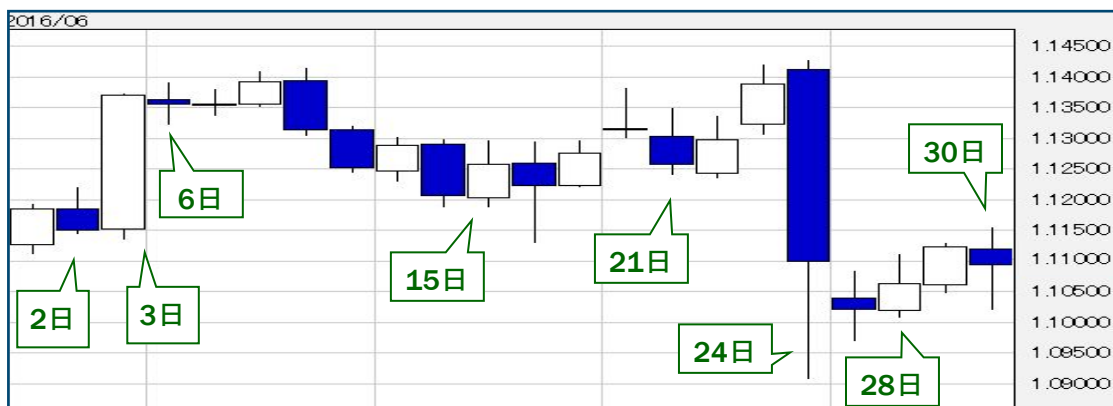
(予想レンジ: 109.000~116.900円)

## ユーロ/ドル 6月の推移

EUR/USD

6月のユーロ/ドル相場は1.09101～1.14273ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.3%の小幅下落(ユーロ安・ドル高)となった。

米早期利上げ期待の後退を受けてドル売りが優勢となり、ユーロ/ドルは1.14ドル台まで強含むも、24日の英国での欧州連合(EU)離脱を問う国民投票を受けて3月以来となる1.09101ドルまで急落。もっとも、月足上には上下にひげが伸びている同時線が出現しており、動いた割には方向感が定まらなかった。その理由として、ユーロ/ポンド相場でユーロ買い・ポンド売りが強まった事が考えられる。



## 四本値

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 1.11280 |
| HIGH  | 1.14273 |
| LOW   | 1.09101 |
| CLOSE | 1.10952 |

|     |  |
|-----|--|
| 2日  | 欧州中銀(ECB)は政策金利の据え置きを決定。同時にECBのスタッフ予想が公表され、ユーロ圏GDP伸び率見通しは2016年が1.6%、17年は1.7%、18年は1.7%(3月時点:1.4%、1.7%、1.8%)、インフレ見通しは16年が0.2%、17年は1.3%、18年は1.6%(同:0.1%、1.3%、1.6%)とした。ドラギECB総裁は「量的緩和を少なくとも2017年3月まで実行」「量的緩和を持続的にインフレが調整されるまで実行」「成長リスクは下方向に傾いている」「下サイドのリスクは世界経済や英国の国民投票に関係している」などと発言。この間、ユーロ/ドルは1.1210ドル台まで上昇後に1.1160ドル台まで反落した。 |
| 3日  | 予想より弱い米5月雇用統計を受け、6月の米利上げ観測がほぼ消滅。これを受けてドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.13734ドルまで急騰した。   |
| 6日  | 米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長が「条件が合えば緩やかな利上げが適切となる可能性が高い」「米経済は前向きな力が後ろ向きの展開を上回る」「5月雇用統計は賃金の伸びがようやく上向いた可能性を示唆」などと発言すると、ドル買いが強まりユーロ/ドルは1.13251ドルまで下落。もっとも、「5月雇用統計は失望であり懸念」としたほか、追加利上げは「より緩やかに進める」と表明し、時期については特定しなかったため、その後1.13923ドルまで反発した。  |
| 15日 | 米連邦公開市場委員会(FOMC)で公表された米経済見通しでは、FF金利見通し(中央値)は2016年末については3月時点から据え置いたものの、2017年末・2018年末は引き下げた。経済成長見通しは2016年、2017年共に下方修正した。これを受けてドル売りが優勢となり、ユーロ/ドルは一時1.12975ドルまで上昇。ただ、コアPCE見通しが2016年、2017年共に引き上げられた事や、イエレン米FRB議長が7月利上げに含みを持たせた事から、買い一服後は上げ幅を縮小した。   |
| 21日 | ドラギECB総裁が「必要なら責務の範囲内で利用可能なあらゆる手段を講じる用意がある」「ユーロ圏のインフレは依然として抑制されている」などと発言。これを受け、ユーロ/ドルが1.12428ドルまで下落した。  |
| 24日 | 英国でEU離脱を問う国民投票が終了。集計開始直後に残留優勢が伝えられると、ユーロ/ドルは一時1.14143ドルまで上昇。しかし、徐々に離脱優勢が伝えられると、ポンド/ドルが暴落した影響を受けて1.09101ドルまで急落した。ただ、下げ一巡後に1.1180ドル台まで戻すなど神経質な展開となった。なお、ECBが実施した的を絞った長期資金供給オペ(TLTRO 2、22日～23日)が公表され、落札額は3990億ユーロだった事が明らかとなった。  |
| 28日 | 英EU離脱が決定した事を受け、ドラギECB総裁が「向こう3年間のユーロ圏経済成長率が0.3～0.5%押し下げられる可能性がある」との見方を示した。  |
| 30日 | 6月ユーロ圏消費者物価指数・速報は前年比+0.1%と予想(±0.10%)を上回る伸びとなった。  |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/USD

## NYダウ平均

|       |          |
|-------|----------|
| OPEN  | 17754.55 |
| HIGH  | 18016.00 |
| LOW   | 17063.08 |
| CLOSE | 17929.99 |

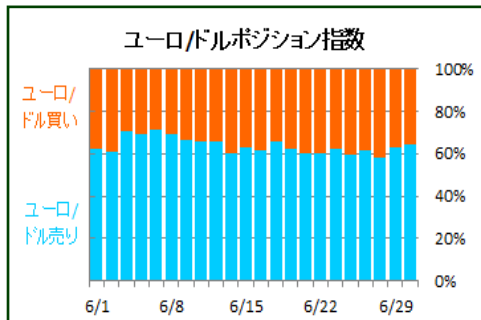
## 独10年債利回

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 0.153%  |
| HIGH  | 0.158%  |
| LOW   | -0.170% |
| CLOSE | -0.130% |

## 米10年債利回

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 1.8441% |
| HIGH  | 1.8546% |
| LOW   | 1.4041% |
| CLOSE | 1.4697% |

## 6月のポジション動向



## 7月のユーロ圏の注目イベント

- ・5月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・5月独鉱工業生産(7日)
- ・7月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(19日)
- ・欧州中銀金融政策発表(21日)
- ・7月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(22日)
- ・7月独Ifo景況感指数(25日)
- ・7月独雇用統計(28日)
- ・7月独消費者物価指数・速報値(28日)
- ・7月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(29日)

## 7月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

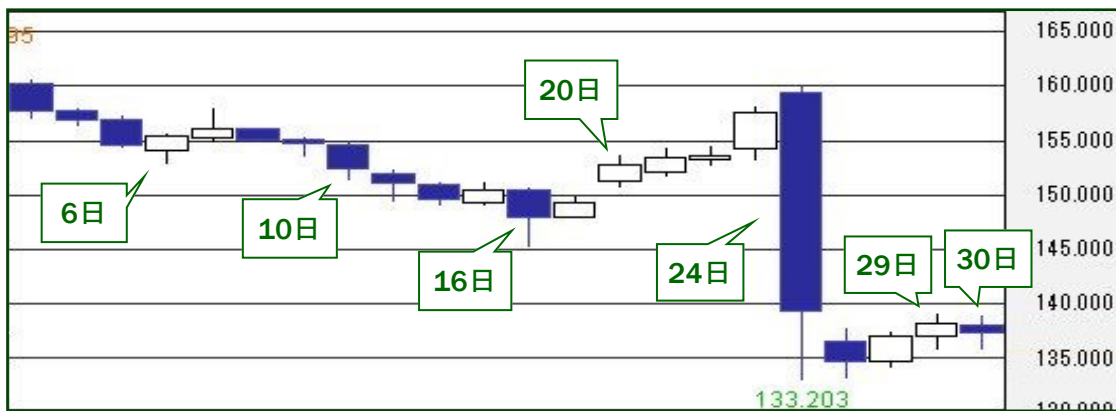
今月はECB理事会が予定されている。6月の英EU離脱を受け、一部で追加金融緩和観測が浮上している。ただし、先月実施したTLTRO2の効果の見極めが必要である事や、足元で英EU離脱をきっかけとしたリスク回避の動きがやや落ち着いている事から、今月の理事会で追加緩和に踏み切る公算は小さいと見る。もっとも、29日にドラギECB総裁が英EU離脱による欧州経済への悪影響について言及しており、今後の欧州経済への影響を懸念して年内に追加緩和に踏み切るとの見方が強い。ドラギECB総裁が会見で今後の追加緩和について言及するようだと、次回(9月8日)理事会での緩和期待が高まってユーロが売られる事も考えられる。

また、英EU離脱決定と共に、米7月利上げ期待もほぼ消滅。金利先物市場では年内の米利上げ開始観測が大幅に後退すると共に、次の一手は利下げとの見方すら浮上している。足元のリスク回避の動きが落ち着きつつある中、26-27日の米FOMC声明で今後の利上げ見通しについてどのような見解が示されるか、市場の関心が集まりそうだ。利上げスタンスの維持が確認できれば、ドル買いが強まってユーロ/ドル相場を下押しす事もあり得る。(川畑)

(予想レンジ: 1.07000~1.14000ドル)

ポンド/円 6月の推移

6月のポンド/円相場は133.203~160.656円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約14.3%の歴史的な下落(ポンド安・円高)となり、最大17.1%下落する場面もあった。最大のヤマ場は英国の欧州連合(EU)離脱が決まった国民投票(23日)の結果が判明した24日であり、ポンド/円はこの日だけで最大26.8円もの下落幅を記録した。直前の世論調査の結果などが残留を示唆していただけに、サプライズの度合いは極めて大きく、市場の反応もそのぶん激的なものとなった。



| 四本値   |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 160.285 |
| HIGH  | 160.656 |
| LOW   | 133.203 |
| CLOSE | 137.395 |

|     |   |
|-----|---|
| 6日  | 英デイリー・テレグラフ紙が5日にウェブサイトに掲載した調査結果によると、同紙の約1.9万の購読者のうち、69%が英国のEU離脱を支持しており、EU残留に票を投じる意向とした割合は29%にとどまった。また、5日付の英日曜紙オブザーバーによると、同社などが実施した最新世論調査で、離脱を支持すると答えた人の割合が43%となり、残留の40%を上回った。これらを受けて週明けのオープンと同時にポンド売りが強まる場面があった。  |
| 10日 | 英インディペンデント紙がオンライン調査の結果として「英国のEU離脱支持55%、残留支持45%」と報じるとポンド売りが活発化。この報道を受けて米国株が下落するとリスク回避の円買いも強まり151円台まで下落した。  |
| 16日 | 日銀が金融政策の現状維持(追加緩和見送り)を発表すると円買いが強まり146円台へ下落。その後、英中銀(BOE)が全会一致(9対0)で金融政策の現状維持を決定し、議事録で「英国のEU離脱は世界経済のリスク」との見解を示した。さらにその後、EU離脱に関する世論調査の結果として「残留支持42%、離脱支持45%」と伝わった事もあって145円台まで下落した。しかし、英下院議員でEU残留派のコックス氏が集会中に銃撃されて殺害されると、世論が残留支持に傾くとの見方が広がり、148円台後半まで反発するなど値幅を伴って上下に振れた。  |
| 20日 | 前週末に報じられた英世論調査の結果、残留支持45%、離脱支持42%となり、16日の下院議員銃撃事件後に残留支持が増加した事が明らかとなった。これを受けて週明けのオセアニア市場オープンと同時にポンド買いが活発化した。   |
| 24日 | 英国のEU離脱を問う国民投票終了後に、投票を終えた有権者への世論調査で残留支持優勢が報じられると一時160円台を回復。しかし、最も早く開票が終了したイングランド北東部のサンダーランド地区で離脱支持が61.3%に上った事が判ると一気に147円台前半まで急落した。その後、残留支持が盛り返すと154円台後半まで値を戻す場面も見られたが、開票作業が中盤に差し掛かり再び離脱支持が優勢となるとポンド売り・円買いが再燃。さらに、英BBCが「離脱派勝利の見込み」と報じると133.203円の安値を付けた。その後、英選挙管理委員会が正式に51.9%対48.1%で離脱派勝利を発表。ただ、G7が緊急電話会議を実施するとの報道などから政策期待が高まると144円前後まで値を戻すなど、荒っぽい展開となった。 |
| 29日 | 前日から行われていたEU首脳会議は「英国の離脱は速やかに行われる必要がある。英国は、できるだけ早くEUに離脱を通知して交渉を開始すべきだ」などとする声明を発表して閉幕。トラスク大統領も会議後の記者会見で、「単一市場への参入をアラカルト的に求めてきても受け付けない」と述べて有利な条件を引き出そうとする英国をけん制した。   |
| 30日 | カーニーBOE総裁が「BOEは恐らく夏にかけて政策を緩和しなければならない」などと述べて金融緩和を示唆すると、ポンド売りが活発化した。   |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## GBP/JPY

## 日経平均

|       |          |
|-------|----------|
| OPEN  | 17097.22 |
| HIGH  | 17145.95 |
| LOW   | 14864.01 |
| CLOSE | 15575.92 |

## FTSE100

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 6230.79 |
| HIGH  | 6504.33 |
| LOW   | 5788.74 |
| CLOSE | 6504.33 |

## 英2年債利回

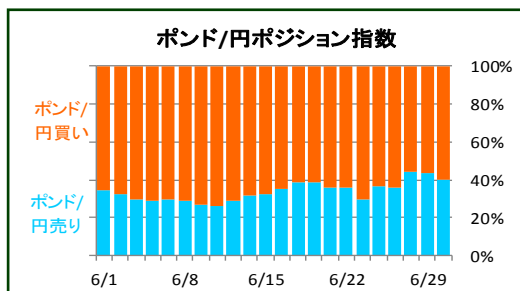
|       |        |
|-------|--------|
| OPEN  | 0.443% |
| HIGH  | 0.547% |
| LOW   | 0.094% |
| CLOSE | 0.099% |

## 英10年債利

|       |        |
|-------|--------|
| OPEN  | 1.442% |
| HIGH  | 1.442% |
| LOW   | 0.861% |
| CLOSE | 0.867% |

## 6月のポジション動向

## 7月の英国の注目材料



- ・6月英製造業PMI(1日)
- ・6月英建設業PMI(4日)
- ・6月英サービス業PMI(5日)
- ・5月英鉱工業生産(7日)
- ・5月英貿易収支(8日)
- ・BOE政策金利発表(14日)
- ・BOE議事録(14日)
- ・6月英消費者物価指数(19日)
- ・6月英生産者物価指数(19日)
- ・6月英雇用統計(20日)
- ・6月英小売売上高(21日)
- ・4-6月期英GDP・速報値(27日)

## 7月の見通し

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

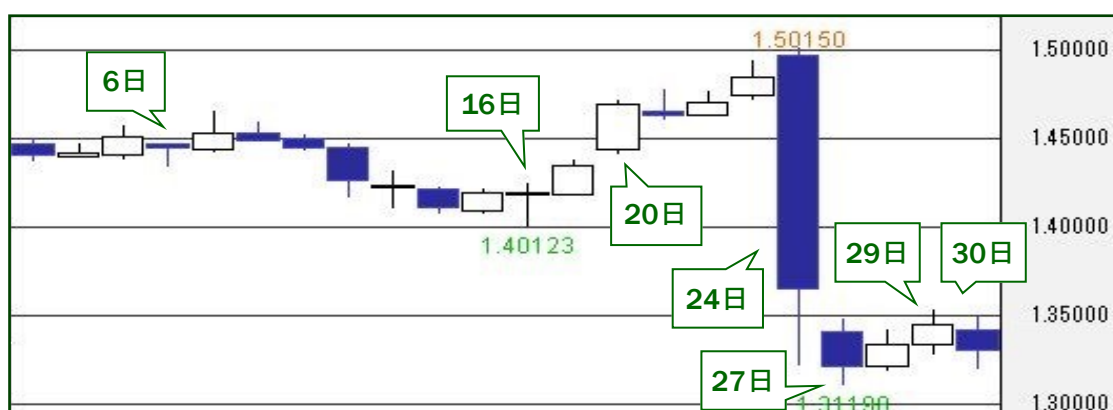
過去25年間のポンド/円相場を振り返ると、月間で15%を超えるモンスター級の暴落が3回もある。92年のポンド危機(最大下落率18.9%)、98年のアジア危機(同16.9%)、2008年のリーマンショック(同26.8%)だ。この6月(同17.1%)が4回目という事になるが、過去3回の大暴落ではいずれもその翌月に一段と下値を切り下げている点が特徴的だ。モンスター級の暴落が起きるほどのショックは、ひと月程度では癒える事はないと考えれば、当然の事かもしれない。今回も7月に133.203円を下抜けるリスクが高いという事になり、値頃感でのポンド買いは避けるのが無難であろう。カーニー英中銀(BOE)総裁は、英国の欧州連合(EU)離脱による経済の落ち込みを和らげるために、7月もしくは8月の金融緩和を示唆しており、国民投票前の利上げスタンスを完全に撤回した。この点からもポンド安圧力が掛かる公算が大きく、7月14日のBOE金融政策委員会(MPC)が注目される。(神田)

(予想レンジ:129.000~141.000円)

## ポンド/ドル 6月の推移

GBP/USD

6月のポンド/ドル相場は1.31198～1.50150ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約8.1%の大幅な下落(ポンド安・ドル高)となった。月間最高値を付けたのが24日(英国国民投票の開票直前)であり、最安値を翌27日に付けた点から見ても、6月のポンド/ドル相場が「Brexit」を睨んで動いていた事がわかる。米国の利上げ先送り観測が高まりドルが売られる場面も散見されたが、米FOMCが利上げを見送ったのも「英国国民投票への不透明感」が一因であった事を考えれば、やはり市場の関心は「Brexit」に集中していたと言う事になろう。なお、27日に付けた1.31198ドルは実に31年ぶりの安値更新であった。



## 四本値

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 1.44781 |
| HIGH  | 1.50150 |
| LOW   | 1.31198 |
| CLOSE | 1.33084 |

|     |   |
|-----|---|
| 6日  | 英デイリー・テレグラフ紙が5日にウェブサイトに掲載した調査結果によると、同紙の約1.9万の購読者のうち、69%が英国のEU離脱を支持しており、EU残留に票を投じる意向とした割合は29%にとどまった。また、5日付の英日曜紙オブザーバーによると、同社などが実施した最新世論調査で、離脱を支持すると答えた人の割合が43%となり、残留の40%を上回った。これらを受けて週明けのオープンと同時にポンド売りが強まる場面があった。  |
| 16日 | BOEが全会一致(9対0)で金融政策の現状維持を決定し、議事録で「英国のEU離脱は世界経済のリスク」との見解を示した。その後、EU離脱に関する世論調査の結果として「残留支持42%、離脱支持45%」と伝わった事もあって1.40ドル台前半まで下落した。しかし、英下院議員でEU残留派のコックス氏が集会中に銃撃されて殺害されると、世論が残留支持に傾くとの見方が広がり、1.42ドル台半ばまで反発するなど大きく上下に振れた。  |
| 20日 | 前週末に報じられた英世論調査の結果、残留支持45%、離脱支持42%となり、16日の下院議員銃撃事件後に残留支持が増加した事が明らかとなった。これを受けて週明けのオセアニア市場オープンと同時にポンド買いが活発化した。   |
| 24日 | 英国国民投票終了後に、投票を終えた有権者への世論調査で残留支持優勢が報じられると1.50150ドルの高値を示現。しかし、最も早く開票が終了したイングランド北東部のサンダーランド地区で離脱支持が61.3%に上った事が判ると一気に1.42ドル台後半まで急落した。その後、残留支持が盛り返すと1.47ドル台前半まで値を戻す場面も見られたが、開票作業が中盤に差し掛かり再び離脱支持が優勢となるとポンド売りが再燃。さらに、英BBCが「離脱派勝利の見込み」と報じると1.32ドル台前半まで続落した。その後、英選挙管理委員会が正式に51.9%対48.1%で離脱派勝利を発表したが、ポンドを売り込む動きは見られず、G7が緊急電話会議を実施するとの報道などもあって政策期待が高まると1.39ドル台後半まで値を戻すなど、荒っぽい展開となった。 |
| 27日 | 英国のEU離脱決定を受けてポンド売りが継続。前週末にスコットランド自治政府のニコラ首相が、独立に向けて2回目の住民投票を行う方針を示した事もポンド売り材料となり一時1.31198ドルの安値を付けた。   |
| 29日 | 前日から行われていたEU首脳会議は「英国の離脱は速やかに行われる必要がある。英国は、できるだけ早くEUに離脱を通知して交渉を開始すべきだ」などとする声明を発表して閉幕。トラスク大統領も会議後の記者会見で、「単一市場への参入をアラカルト的に求めてきても受け付けない」と述べて有利な条件を引き出そうとする英国をけん制した。   |
| 30日 | カーニーBOE総裁が「BOEは恐らく夏にかけて政策を緩和しなければならない」などと述べて金融緩和を示唆すると、ポンド売りが活発化した。   |



## GBP/USD

## NYダウ平均

|       |          |
|-------|----------|
| OPEN  | 17754.55 |
| HIGH  | 18016.00 |
| LOW   | 17063.08 |
| CLOSE | 17929.99 |

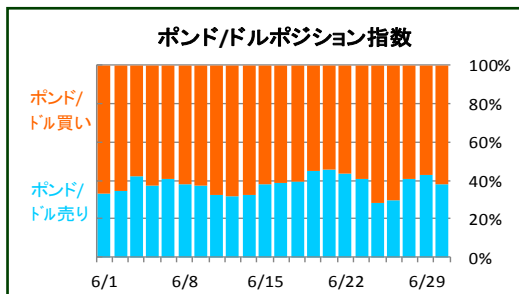
## 米10年債利回

|       |         |
|-------|---------|
| OPEN  | 1.8441% |
| HIGH  | 1.8546% |
| LOW   | 1.4041% |
| CLOSE | 1.4697% |

## 英10年債利回

|       |        |
|-------|--------|
| OPEN  | 1.442% |
| HIGH  | 1.442% |
| LOW   | 0.861% |
| CLOSE | 0.867% |

## 6月のポジション動向



## 7月の英国の注目材料

- ・6月英製造業PMI(1日)
- ・6月英建設業PMI(4日)
- ・6月英サービス業PMI(5日)
- ・5月英鉱工業生産(7日)
- ・5月英貿易収支(8日)
- ・BOE政策金利発表(14日)
- ・BOE議事録(14日)
- ・6月英消費者物価指数(19日)
- ・6月英生産者物価指数(19日)
- ・6月英雇用統計(20日)
- ・6月英小売売上高(21日)
- ・4-6月期英GDP・速報値(28日)

## 7月の見通し

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/ドル相場の1.40ドルは、英中銀(BOE)の非公式防衛ラインとの見方もあったが、欧州連合(EU)離脱の決定を受けてあっさり下抜けた。その上、カーニーBOE総裁が利上げ方針を撤回して7月もしくは8月の利下げを示唆するなど、BOEはポンド安を容認する構えのようだ。引き続き、ポンドには下落圧力が掛かりやすいと考えるべきだろう。

一方の米国サイドでは、一時50%前後まで上昇していた7月FOMC(26-27日)での利上げ確率がゼロ%に低下しており、もはや利上げの期待は全くない。そればかりか、9月FOMC(20-21日)では、わずかながら(7月1日時点で6.0%)利下げの確率が織り込まれている。ただ、米6月雇用統計(8日)が5月の弱さのある程度カバーできれば、7月FOMC声明が極端にハト派化する事はないだろう。市場にくすぶる利下げの思惑が消えるだけでもドル高が進みやすい地合いと言えそうで、7月のポンド/ドル相場は、ポンド安とドル高の両面から下落圧力が掛かる可能性もある。(神田)

(予想レンジ: 1.25000~1.37000ドル)